

## 指定討論 1

中尾知代

初めまして。岡山大学の中尾でございます。私の肩書とところに、カタカナでポスト・コロナル・スタディーズとオーラル・ヒストリーとございます。耳慣れない方に申し訳ないので、簡単に言っておきますと、ポスト・コロナル・スタディーズというのは、植民地主義というものが世界の中で生まれ出てきて、それ以降の種々の後遺症とそれがもたらしたもので、それが与えた変化を考えながら文化・社会・歴史を整理し直すことを指します。だから今、「植民地主義が終わっていないんじゃないか」って言われたらその通りで、現在の影響も全部指します。で、その中で特に植民地という時は、よそ様の家に入り込んで「ここ、私のにしているから」って言うわけです。「この人はこの家を使っているから、私が使ってあげる」っていうような理屈をつける。そして、その人たちを、人間じゃないって言ってみたり、「あそこは鬼だ」って言ってみたり、「私が桃太郎だから退治しに行ったんだ」というような形にすることが起ります。そういう「他者イメージ」を一番強く作るのが戦争や植民地化の時だという訳です。そういうことで、私は戦争時の記憶や体験を扱う時、第二次世界大戦は植民地の問題を挟んで起こった戦争という

こともありまして、この概念を使わせていただいています。

オーラルヒストリーというのは、日本語で口述史、口で述べる歴史と訳されることも多いです。しかし、ちよつと違うなと思うのは、オーラルには、音の中に耳で聴く「オーラル (Aural)」という意味合いも少し響いてくる感じで、「あなたが語ってくださることを私が聞く」「私がこういう風に聞くから、あなたはこういう風に語ってくださいなんだ」という、対話性というか、その時の相性というか、コメントを考えます。違う聞き方をしたら、違うように答えるときってありますよね。そういうところを重視するので、「聴き取り」というよりも、「オーラルヒストリー」と言っております。「聴き取り」というと、(この言葉は今慣習的に使われたので、もうちょっと豊かな面を持つと思うんですが)あくまでも情報の対象がまずあって、こちらは調査する側。主体性はこちらにあって、話してくださる方たちの情報を、まずクールに見ようとする傾向がみえる。それに対して、私たちは「語りの相互性」というホットな部分を考えに入れ、注視するという点で「オーラルヒストリー」という言い方をしています。

私がなぜ戦争の記憶研究を始めたのかというのは、外に置いてある本に書いてありますので省略いたしますが、少し質問させていただく前に、気分転換に私がやっている調査のうち皆様に関わりの深いものをごく一部を見ていただこうと思います。

〈疎開経験はどう聴くか〉



図1 テディベアを抱える女の子

の日にホテルで閉じ込められている私たちです。イギリスらしくテディベアを持っているわけです。evacuation（疎開）のvacはvacuumです。つまり、その場所を空けるといふ考え方をします（日本の「疎開」は、元々は集団行動の兵士を散開させ、攻撃目標にしにくくすることを指します）。ロンドンなど砲火の集中するところを空けるといふ意味のevacuateから来ています。



図2 高野山「ビルマ慰霊祭」の男の子

どういふふう子に子どもの記憶が蘇っていきかということとは、皆様の研究と共通する部分かなりあります。ここでは一つ、例として戦後六〇周年にあたる二〇〇五年という年を巡り、英国人が戦争体験をどう聴こうとしたか、

これ（図1）は日英の経験比較ということではありませんが、テディベアを持っているイギリスの少女です。実はこれ、ロンドン同時多発テロ（二〇〇五年七月七日）が起こったその日にホ

という状況を見たいと思います。その中ではやはり、「勝った側の国」として「国家が残していく記憶」という問題が出てきます。

こちら（図2）は対照的に、高野山のビルマ戦線の慰霊祭におけるもので、曾孫さんがお参りした後疲れて座っているところですね。周りに亡き戦友をいたむ元兵士がいます。首に巻かれている数珠が示す遺族の思い、トラウマも、喪失体験も、戦争の痛みにしても、この二つの国の家族たちに異なるところはありません。それを突き合わせていくかは、このプロジェクトの「和解と赦し」の方々が受け止めるのだろうと思っております。



図3 リビング・ミュージアム

これ（図3）は二〇〇五年の、リビング・ミュージアムというイギリスの公園における一シーンです。ここでは、当時の生活が再現されています。セント・ジェームズ・パークの中が全部戦争関係の展示・生活の再現になっています。中に入ると当時の生活を再現した役者が目の前で演じてくれている一種の見世物小屋です。それに対して、手前側の入場者は話しかけています。すると、お芝居できるんです。「それ、お値段いくらでしたの?」「これがね、いまお値段上がっています」とか、「空襲怖くありません?」「そういえばね、この間のロンドンのどこそこで爆撃



図5 Were you an evacuee ?

おそらく両方とも疎開者だったご夫婦が内容を見ているわけですね(図6)。周囲はその家族たち、という感じですよ。胸に必ずタグをつけていったので、それが一種の疎開者のシンボ

名前と住所を書いた札タグがついています。あれは、疎開でロンドンのパディントン駅から、出発した男の子が忘れたデイベアにくっつけた札なんです。疎開児童の特徴は胸のところこの荷札のようなタグがついている。女の子が男の子のタグを見つけて、「Were you an evacuee? (あなたも疎開者?)」という仕草を捉えた、その写真で疎開経験者を誘います(図5)。



図4 疎開児童たちの小屋

があつて」と、当時の会話をしてくれるわけですよ。そうやって当時の実感を味わう。ほかにも塹壕が掘ってあったり当時の食べ物を食べたりいろいろ再現されている。これ(図4)が疎開に行った方々の記憶を集める『トウギャザー・アゲイン』という小屋ですよ。皆さん、パディントン・ベアでご存じだと思わんですが、パディントン・ベアには荷札のような

でも聴き取りをする。入った中でもう少し疎開経験を話したい方たちには簡単に履歴を書いてもらおう。その後訪ねて、もう少し長い話を聞いてもいいかと許可をとる(図7) (図8)。

この小屋に来るまでにさっきのような再現展示を延々と通ってきているので、戦時中の記憶がだんだん心と体に戻ってくる。食べ物も当時のものを食べて、全身が回想モードに



図8 疎開展示の記憶の世代間継承

ルのようになっていた。疎開特集の小屋に入るときには自分の名前を書いて入ります。自分も疎開児童の気分を味わいつつ入る。疎開研究のプロジェクトをしている人たちがその場



図6 小屋の中で疎開児童死亡リストを見る夫婦



図7 疎開経験の聴き取りの様子



図9 疎開に向かう女学生たち(当時)

開に向かう女学生たちですね。

小屋の中に、Evacuees Reunion Association(疎開者同窓会)というブースがあって、そこに資料がある。さっきのご夫婦が見ていたのは、子どもたちの死亡記録です。名前だけお見せしましたけれども、実際のリストはもっと長いんです。もちろん出身地も書いてあります。死亡理由はチフスなどもあります。意外と多かったのが交通事故と敵の爆撃(enemy bomb)などです。疎開先に行っても結構そういう原因で亡くなっていたことがわかります。この記録が延々と続いています。語りの記録を誘う質問は、「あなたは疎開に行っていましたか」「あなたは荷札をつけていましたか」「家から離れて、見知らぬ人々と暮らしましたか」「元疎開者の人たちと会って、あなたの記憶と一緒にシェアしてみませんか、その日々を決して忘れられない人々と」と呼びかけています。一種のEvacuation Association(疎開者協会)みたいなものをつくらうという目的が一つあるわけです。

戦争を想起する工夫はうまいな、と英国で感じます。私は

なってる時にここに入ってくるわけですね。そうすると、私たちには白黒に見える戦争の状況が、彼らにはより生き生きとカラーとなつてわかるわけです。

この写真(図9)は疎



図10 女性の戦争記念碑

普通、聴く相手は捕虜や軍人がメインなんです。が、戦争の状況の復元や、今お見せしたように家族ネットワークづくりをすごく目指すんですね。回想の場をつくるのが非常にうま

い。必ず劇場型に持つていくというか、演劇的に持つていくという感じがあります。また、疎開文学もあります。また疎開の解釈としてポジティブなものとしては、疎開によって上層階級の人たちが初めて農村の貧しさを見たことが戦後の民主化に役立ったとの位置づけが国家全体としてされています。そういう点ではいい部分もありますが、勝った国として、どうしても勝ったということに対してポジティブでなくてはならない。勝った国としてどうしても戦争経験はすばらしかったという戦争の見方や歴史意識が非常に強くなります。

この新記念碑は(図10)女王が、女性が戦ったすばらしさを讃える様子です。この年は、軍人週間が一週間続き、その最中でロンドンのテロリズムが起こった。そのため「第二次大戦で戦った人は今のテロと戦っている人と一緒だ」という感じの盛り上がりとなったんです。ちょっと異常で、人工的な感じがしました。その中で「戦争の記憶」が《第二次世界大戦》と《対テロ戦》が意図的に塗り重ねられる部分がありました。これはある意味勝った国だからこそやっちゃうわけです。



図 12 日本軍抑留者慰霊碑の少女像

子供の銅像で作られています、  
 ハーグの慰霊碑は老人・大人・  
 いました。  
 腹の底からぐっと来たような経験  
 が私の中でも起こるわけですね。  
 元抑留者の方が歌う抑留所で死  
 だ仲間のためのレクイエムを聴い  
 ていると、それだけで泣いてしま  
 いました。



図 11 日本軍抑留者と家族 3000 名の慰霊

留されていた人と、その子孫の人たちです。日本軍に抑  
 留されていた人と、その子孫の人たちです。これが毎年八  
 月一五日に集まる。やっぱりこういう人たちの心の傷も、先  
 ほど見たような飢えが与える傷と非常に共通する部分があり  
 ます。これら集まった方の一人ひ  
 とりの経験談を聞いていると、先  
 ほど皆さんが中田さんのお話で

こちら(図11)は、オランダの慰  
 霊祭のときの写真です。二〇〇九  
 年八月一五日です。これはハーグ  
 の慰霊祭で、まさに子ども時代を  
 日本軍の抑留所で送っていた人た  
 ちの写真です。たとえばこの方は  
 お父さんが日本軍の将校だった人  
 なんです、集まる数の多さが半  
 端じゃないんです。三〇〇〇人く  
 らい集まっているんです。会場の  
 皆さんと同年です。日本軍に抑

この女の子(図12)なんかは収容所でむごたらしいものを見てし  
 まったということを表しています。周りのひまわりの花は彼  
 女に共感したり、同い年の友人を亡くした抑留所経験者が捧  
 げたものです。

〈論者へのコメント〉

写真はこれくらいにして、先ほどの皆さんの発表に対して  
 の私のレスポンスをしてみたいと思います。まず森先生に対  
 しては、加害と被害という質問の設定自体が少し難しいので  
 はないかなという点がありました。たとえば、子どもと、参  
 政権を持たない女性の方たちで、植民地責任とは何かがよく  
 わからないままの方に、「日本の戦争の加害についてどう思っ  
 ているか」と聞くからだと思います。あとは、語り手の側も  
 たえばそれをどうするか。お兄さんが戦争に行っているの  
 か、死んでいるのか、親族が殺されているかどうかで、問い  
 に対する答えの感じ方はかなり変わってくるのではないかと  
 いう気がいたします。

東谷さんのほうは、聞いていて歴史家だなと思ったのは、  
 歴史叙述、やはり歴史叙述をどう正確にするかということに  
 対して一種の「萌え」というか、それに対する情熱が感じら  
 れます。それに加えて、どこまで「人間」に近づいていくか  
 という部分を、どのように今後増やせるかが大事ではないか  
 と思っただけですね。

史料化のところでは、大人が文書で、子どもが口述という  
 のがありました、本来は二〇年前に聞いていたら大人の口

述もあつたはずなんです。その欠けた部分をどうするか。国立大学に二〇年勤めて思うのは、文書自体はやはり「お上に都合のいいように」あるいは「結論が正しかった」と思わせるように、どこかで編集してある。史料批判の大切さは先ほどおっしゃっていましたが、そこをいったいどう補うのか。

もう一つ、口述の資料には心情資料とか心情記憶としての価値が大きいと思うんです。どんなふうに使っていたか。どうすればよかったか。何がうれしかったか。何が悲しかったか。これは言葉の方が、より生々しく、多く表れる。そういう感情の記憶を残しておくということは、その当時制度的に何がどうだったかということ以上に、人間の歴史を残している上でとても大事な資料と考えることができます。

あと、備中松山藩において高梁というのはかなり特別なところ。岡山に二〇年いても絶対岡山人とは思ってもらえないのですが、とりわけ高梁はそうです。それは神戸でもそうだと思います。どうラポールを築いていくのか、関係性を築くのか。今後地元と協力しながらやるどころかと思いましたが。

最後に、本当に感動的な、と言ったら申し訳ないんですが、感情を揺さぶられる中田さんのお話を聞いていて、私も母親から聞きたいいろいろな話を思い出しました。でも、このような相対化できない話、我が子にスフを着せた父親がどこまで自分を責めた気持ちは、貴重だからこそ、個人レベルで終わらせてはならない気持ちだろうと思いました。そこには、B29で人を焼いて、人の戦意を喪失させようという非常に冷

酷で冷静な政策があつたわけですよ。敵側の「人間」を「焼いて抹殺してかまわないもの」と考えている当時の考え方もあつたわけですよ。

これほど痛ましい話だからこそ個人の悲しみと責めに閉じこめず、その状況を可能にしたシステムごとに見つめなおさねばならない。また、かといって政府の責任を問うだけではなくて、社会の制度・人間を見る見方・敵に何をしてもよいと考える戦時のやり方・制度と仕組み等など、当時の敵味方の人間たちの持っていた視野の拠つて来るところ、責任の所在を、どこかで冷めた、冷静に見ていく努力をする。そうすることによって、先ほどのような中田さんの話が本当の意味で生きるのではないかと思っております。でないと、悲しみに溺れそうになるからです。それでも整理のつかない部分は、慰霊や語り伝えていくというかたちで生かしていくことしかできないし、またそれが本当に大事な役に立つてくるであろうと思います。

これが私のお三人に対する気持ちですが、先ほどの写真を見ていただいて、最後に結局どの国にもこういう人たちが残る、そういう人々の記憶がある、ことを覚えておく必要性を感じます。しかも敵対していた民族の人たちとどうやってそういう体験・記憶を突き合わせるかという「和解」への課題が確実にある。そうでなかったら、みんな自分の悲惨な話に埋もれてしまう。どれも本当に痛ましい経験をした人たちだから。自己憐憫というのではないのです。

でも、この元、殺し合った人、敵対していた人たちが話し

合う相互理解のための時間はまだ残っているわけですね。わずかかもしれませんが。でも残っているんです。それはすばらしいことだと思います。

私のコメントはここで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。また後ほどご質問下さい。